

日英兩國語における 自國要素と外來要素

速 川 浩

第一章 語彙上から

假に表題の如く題して英語内における French, Latin 等の所謂 Italic 系統語の借用語の自國要素に對する位置，又それと色々の點で比較され得る日本語内の漢語要素の在り方，それ等二つの自國語と借用語の對立の仕方に見出される類似又は相異の點を主として論じようとするものである。

現在全世界で話されている各國語で孤立した未開野蠻の國の言葉は知らず，およそ文明の進歩した國々の國語は他國との交通接觸，文化の流通等の爲必ず多くの外國語を借用しその儘の形で，或は消化變形して自國語の如く自由に使用して居るが，今問題として擧げて居る日英兩國語はその中でも殊に多くの量を多くの國語から攝取して居る。歐洲各國語中でも英語はフランス語ドイツ語等の可成り國粹的で且保守的であるに比べると著しく寛容で殆どあらゆる國語から多量に借用しているがその中でも，French 又それを通じ或は直接に借用した Latin の Italic 系統の語は他の面からの借用語を斷然壓している。Latin について言うなら大陸時代に既に Teuton 民族が Latin 民族に接して得た語，ブリテン島にローマが進駐して居た時代に残した語はよし少くとも，六世紀末に St Augustin 等のキリスト教布教と共に廣まつた主として宗教關係の語，文藝復興期に Latin 文学，又は Vulgate 譯聖書の影響により学んだ語，更に近代の科学用語等各段階を通じて多くの語を取入れた。又 French について見れば既に Edward the Confessor に始まりついで1066年の William 一世の Norman Conquest を一大轉機とする Norman French 時代，上流社

会の佛語，下層社会の英語の二元的對立が解け始め眞に英語の中に佛語が融合して來た十三世紀末から十六世紀初頭にわたる量的に全盛期，最後に王政復古から現代に到る文藝衣服法律政治方面の多くの語を借用した時代と分けて考える事が出来る。そして Latin の多くはこの French を通じて借用された。

語彙的に如何に多くの物を吸収して居るかを A. G. Kennedy が Skeat の Etymological Dictionary of the English Language (第四版) の卷末 Distribution of Words 所載の語を分類計算している。今之を Germanic 系の物と Italic 系の物との比率に重點を置いて整頓すると次の如くなる。

Germanic	4.800	32.5%
English Proper	3.339	22.6%
Scandinavian	669	4.5%
他のゲルマン諸語	792	5.4%
Italic	6.889	46.6%
French	3.895	26.4%
Latin	2.339	15.8%
他の Romance 語	655	4.4%
その他	3.061	20.5%
計	14.750	

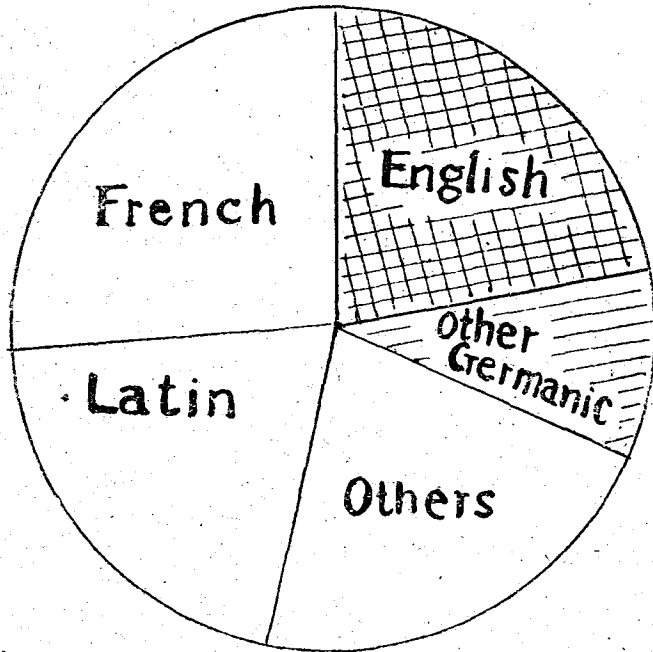
之を圖表したのが第一表であるが一見して固有の英語は 2 割強にすぎず，他のゲルマン系の語を加えても猶三割強，F. L 語に他のロマンス語を加えたイタリック系の合計四割六分に對し全く劣勢である。英語は印歐語中ゲルマン系に屬する國語であるが，これだけを以てすれば恰もイタリック系の國語に分類した方が良い様な奇妙な錯覺さえ起すのである。

目を次に國語に轉じて眺めると之も又實に多様の源流から語を借用して語彙

スカンヂビヤ語は Danish Invasion により英語の中核に當る多くの語を残した。他のゲルマン諸語とはドイツ語オランダ語等，他のロマンス語とはイタリア語，スペイン語，ポルトガル語，その他の部ではギリシヤ語1646語11.2%，ケルト語166語1.1%等が多い。更に488語の hybrid, 14語の語源不明語を含む。

を増している。古くは少數のアイヌ語朝鮮語梵語、近世の南蠻語紅毛語、最近の歐米各國語等を數える事が出来るが中でも王仁の文字なき國に齎した千字文

第一表



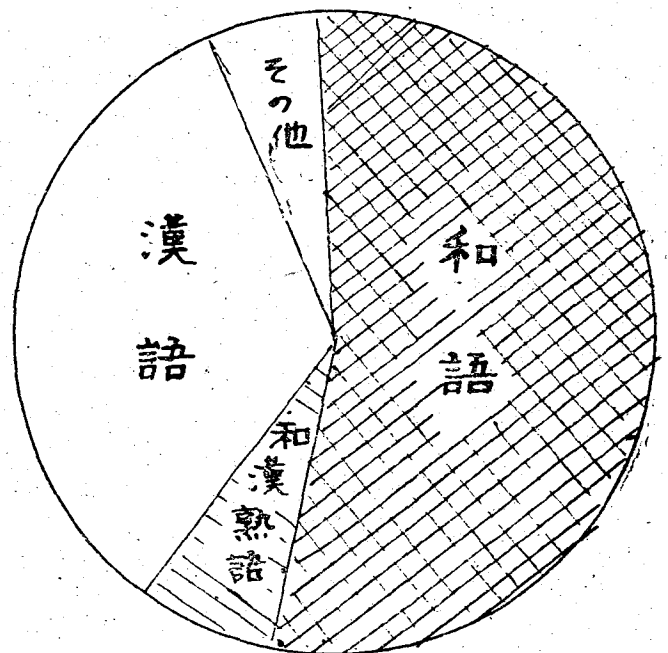
論語を契機とする漢語の影響は壓倒的で爾來獨特の發展をしながら良く國語内に消化されて來た。今若干の唐音語宋音語等も廣く漢語に含めて「言海」所載(註1)の語を和語漢語に分けて見ると

和語	21.817語
漢語	13.642語
和漢熟語	2.724語

外に約二千の外來語が別に載せてある(この數は勿論現在では之位では留らない)之を第二表に圖示したが約37%が漢語で、

第二表

影響の大きさを如實に語つてゐる。然し英語内における Italic 語の46%に比しては猶低率の様に見えるが此所に注意すべきは前記和語57%の過半が漢字で表記されている事である。勿論假名も漢字から作成されたのではあるが完全に吾國獨特の發音文字であるから問題外として前記の漢字の訓讀語は意義的には和語であり表記的には外來語であると言う兩生的な物である。この點英語では既に六世紀に



Runic alphabet を Latin alphabet に替えて居たので Norman French の影響も文字的には二三の字の變改に留つたのとは根本的な相違である。

第二章 文体論から

以上は辭書所載語による配分であるが辭書はその性質上稀にのみ用いる語も日常語も差なく列擧してあるので之を以て直に影響の大小を論ずれば外來語の勢力の余りに大きいのに驚くであろう。然しながら今實際に個人が語り書く場合にどの位な外來語を使うかという頻度 (frequency) の角度から之問題を眺めれば又別の形相を呈するであろう。之場合個人の性向、時代、題材等により多くの開きがある筈である。Emerson^(註2)の研究によれば英文学者中最も多く Italic 系の語を使用したのが Gibbon の 30%、Johnson の 28% である。當時の vulgarism に對する叱正的態度から學識にまかせて古典から莊重中正な語を選んで使つた Johnson、及びその亞流の Gibbon 等の最高率は想像出来る所である。最低は Bible の Three Gospels の 6% で、之は聖書の古淡素朴な多くの文人の模範となつた文體の大きな原因となる。いずれにせよ最高の物ですら 30% という數字は前の 46% に比し大きな差がある。種類から言つて少い純英語が總數において絶對多數であるのは頻度數の高い語が多い事を示している。この點は後に詳述する事として現代米作家の中から兩極端にある Hemingway と Faulkner の文體のサンプルを示して見る。

"I am going to sleep," he said. "Sleep well, beloved."

Then he was asleep and happy as he slept. But in the night he woke and held her tight as though she were all of life and it was being taken from him. But she was sleeping well and soundly, and she did not wake. So he rolled away onto his side and pulled the robe over her head and kissed her on her neck under the robe and then pulled the pistol lanyard up and put the pistol by his side where he could reach it handily and then he lay there in the night thinking. (Ernest Hemingway: For

Whom The Bell Tolls.)

I will have to *try* to tell about Monk. I mean, *actually try*--- a *deliberate attempt* to bridge the *inconsistencies* in his *brief and sordid and unoriginal history*, to make something out of it, not only with the *nebulous* tools of *supposition* and *inference* and *invention*, but to *employ* these *nebulous* tools upon the *nebulous* and *inexplicable material* which he left behind him. Because it is only in *literature* that the *paradoxical* and even *mutually negating anecdotes* in the *history* of a *human heart* can be *juxtaposed* and *annealed* by *art* into *verisimilitude* and *credibility*.

(William Faulkner : Monk)

下線の語は Italic 系の物であるが前者には僅か6, 後者には同行中に32を数える。Hemingway が極めて平易な Anglo-Saxon 系の単シラブルの語からなる simple sentence を並べて素早い機關銃の様な斷續音のリズムを生み出せば Faulkner は逆に難解な長シラブルの F-L 系の語からなる複文を好んで低徊澁滞な文體を作る。この例だけの含有率は前者は5%, 後者は34%である。Faulkner の文で氣付く事は AS 系語は殆ど一シラブルなのに FL 系語は平均三シラブルの長さで極端な對照を示して居る事であるがこの點も後に觸れる。

次に同様にして日本の各種の文體を研究し和語と漢語の比率を出したいのであるが先ず英語の場合にはなかつた難關に出会う。それは國語では字を單位に分ち書きはしても語を單位に分割した表現をしない。その爲助詞か活用語尾か、接辭を認めるか否か、諸國民の如き語は一語か二語か等各人各説の有様である。その困難を避けて此所では波多野完治氏^(註3)が國語の文章の長さを研究した時に行つたように第一に字を單位に考え、假名、漢字訓讀、漢字音讀の數を擧げる。次に私案により音節本位の考方をして漢字は八割以上が二音節、後は一音節、訓讀の場合は稀に三音節以上に讀まれるから平均2を乗じて次の如く計算する。

和語要素 = 和語の假名書數 + (漢字訓讀數 × 2)

漢語要素 = 漢語の假名書數 + (漢字音讀數 × 2)

A 字を基準とする比率

B 音を基準とする比率

	仮名	漢字訓讀	漢字音讀	和語	漢語
四迷「平凡」	61%	35%	3%	95%	5%
露伴「五重塔」	57%	32%	11%	84%	16%
漱石「草枕」	61%	23%	15%	77%	23%
鷗外「ぢいさん ばあさん」	62%	21%	16%	76%	24%
有三「無事の人」	84%	10%	6%	90%	10%
舊約, 創世紀	57%	40%	3%	96%	4%
憲法前文	57%	2%	41%	42%	68%
小學讀本	82%	12%	6%	89%	11%
新聞論評	59%	7%	34%	51%	49%

この表を通じて吾々は色々の事に氣付く。

1. 二葉亭四迷の「平凡」の文體は現代作家と比べても猶漢語が最低で、當時にあつては正に劃期的な俗にくだけた文章であつたらう。然し彼の漢字使用は可成高率なのは「^{ちもち}温かな^{ごくごく}乳汁が^ふ滾滾と」「^ふ不覺^{ごうごう}昏々と」の様な無理な訓讀が多かつた爲である。その傾向を更に進めたのは聖書で漢字使用は最高(43%)でありながら漢語使用は最低(3%)という奇現象を呈する。但し之は四迷の俗語調と異り「^{かたち}定形なく^{ひなし}曠空くして^{やみ}黑暗淵の^{おもて}面に」式の雅語に漢字を振つた爲である。

2. 漢語の最高率は憲法等で代表される法律文、ついで論文調で、現代の漢語がいずれの筋で最も好まれて居るかを明示して居る。かなり漢語の多いと思われる作家の文章も之等に比しては半ばにも達しない。憲法と聖書を比べると漢字の使用は共に43%で同じ高率だが訓讀音讀の率が殆ど逆に一方に傾いて居る事がわかる。

「平凡」は有名な十一章ボチの所、「五重塔」は之も有名な其三十二、嵐の場、「草枕」は冒頭の「智に働けば角が立つ」一節、「ぢいさんばあさん」は冒頭から千語、「無事の人」は劈頭から一段千八百字、創世紀は第一章全部、小學讀本は五年用國語教科書「わか草」すずめの課、新聞は某日の毎日新聞の社説である。

3. 山本有三の文章は氏の國語理念の實行であり漢字の使用を(16%) 小学讀本の線(18%) までに制限した。しかもその文章中には漢語を仮名書きした用例は殆どない。之は漢字制限は結局文字の制限に止まらず漢語の制限をも意味するのである。それにもかかわらず平凡や聖書よりは漢語の使用率が高い。それは現代の文章ではこの位の漢語を排除しない方が却つて平易である事を證據立てている。

第三章 ^{フリークエンシー} 頻度 上から

此所で先にちよつと觸れた英語では頻度数の高い語ほど AS 系であると言う臆測を vocabulary selection では Thorndike の一万語表と Horn の一万語表を折中補正して最も合理的であると推奨される Maki-Faucett ^(註4) 表により立證したいと思う。同表では最も効用の多い約340語を indispensable words と稱し value 1 より順に 8 までに並べ、それにつぐ約 1200 語を essential words と呼び、value 10 より34までに配列した。(value 9 は兩語群の斷層を示す爲に省いてある) それ以下 useful words, special words と分類するが此所では最初の二群、約1500語について value 別に Germanic 系語と Italic 系語の對比の姿を眺める事にする。前者は AS 系語と良く消化された they, take, war 等の Danish words 若干を含み、後者にはこの表に関する限り FL 系語以外の Italic 語は存在しない。見易い様に二群ごとの數字を出した。

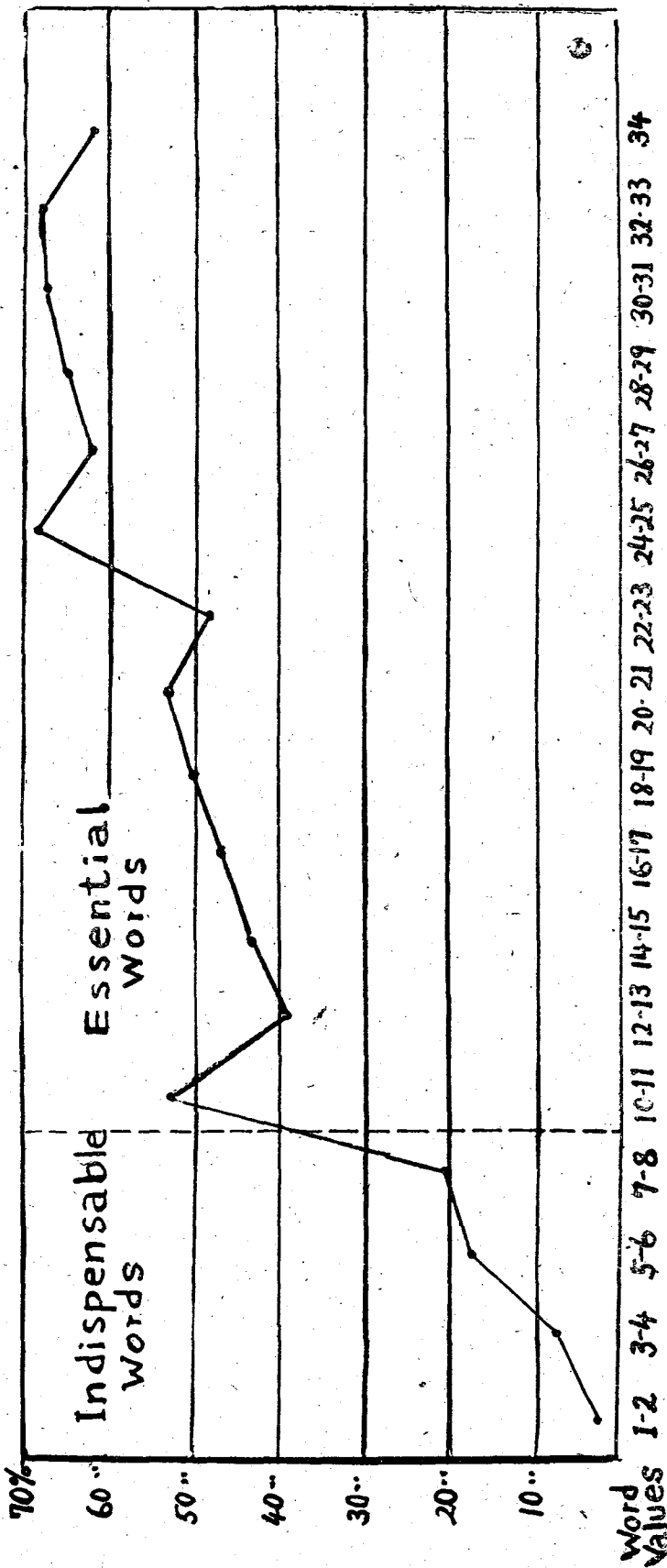
この表は明瞭に次の事を指示して居る。

1. グラフは顯著に上昇カーブを描く。殊に indispensable words 内では FL 系は稀で essential words 群に入り急騰する。この二群の斷落をこの邊に置く事はこの角度から見ても妥當と思われる。

2. 殊に value 1—4 あたりまでは FL 系は僅少で實際には very, place, just, order, part, use, people の7語を含むに過ぎない。

3. この1500 語表内で兩系統いずれにも屬しない借用語は silk, tea

Word Value 別 Italic 系 語 比 率



(Chinese) coffee
 (Turk-Arab) tele-
 phone(Greek) 等數
 語を出でぬ。故に A
 S 系の語は表のカー
 ブと丁度正反對な倒
 影的な線を描く。そ
 れで50%を越した18
 -19value邊からFL
 系の語が AS 系語よ
 り多く上廻つた事と
 なる。

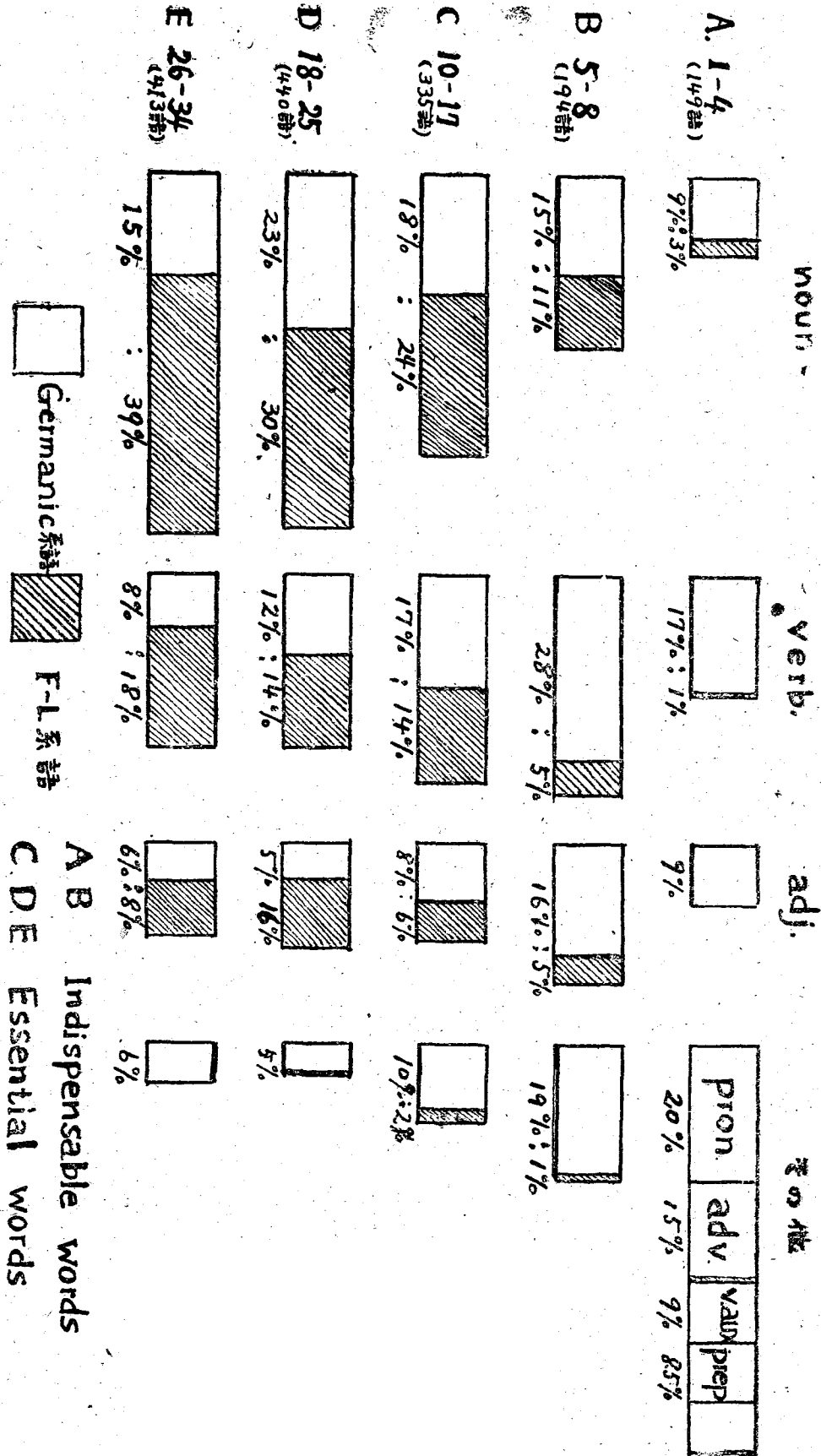
4. value 24以上
 は60%線を越えて大
 體平坦な線となつて
 いるがこの調子は今
 後大體維持されるで
 あらうと推察される
 (勿論兩系統以外の
 語は増大して來るで
 あらうがAS系對FL
 系の比率は變らな
 い) 何となれば前に
 あげた Skeat の辭
 書の語源別分類で兩
 系語の全體の中に占
 める比率は32.5%對
 46.6%で之は兩者同

志の比較では大體 4 對 6 に當るからである。

國語でも同じ様な研究をなしたいのであるが、國語では語別の頻度數の研究は信頼すべき物が出來て居ない状態で残念ながら不可能であるが大體同じ傾向が現われる事が想像される。

第四章 品詞論から

次に品詞別に自國語と外來語の在り方を考えて見る。國語を異にする二國が接觸交通し始めた時最初に移される語は翻譯不能な地名人名であろう。次に新奇な外國の事物風俗習慣等に関する具體概念を持つ普通名詞が之に續く。抽象理念を示す抽象名詞はもつと高度な文化が理解される様になり始めて輸入される。名詞に次いで動詞形容詞副詞等のやや具體的内容を持つ語が入り、文法的機能の本體とする形式語に至つては最後迄外來語の侵入に抵抗する。この事實は英語の場合も國語の場合も歴史的に實證される。St. Augustin の布教と共に一般化した Latin は Emerson によれば 108 語でその内 26 語は宗教關係語、しかも church, pope, altar の様な實體を持つ語のみで後世の語の様に教理に関する抽象語はない。更に 29 語が動植物名、46 語は珍奇な新しく紹介された事物で、動詞は dight (=prepared), offer, shrive, spend, stop の五語のみ、それに形容詞が僅か crisp, short の二語あるだけである。^(註5) 國語の例を示せば王仁の論語千字文を獻じてから (285年)、約五百年を経て現れた万葉集には漢語は題詞を加えて 40 語に過ぎず動詞らしき物はない。それに百數十年遅れた竹取物語に至り約 100 の名詞の外に案ず、要す、曹司す等の動詞 13、^{たいたい}怠々しの形容詞、切に、優に等の副詞數箇が見出される。土佐日記は漢語 39 中 34 語までは名詞でその他は具す、怨す、頓に、^{こもこも}骨々し等數語に過ぎぬ。^(註6) 之等は歴史的に見た外來語移入當初の共通の姿であるが現在の語彙中에서도それ等品詞の絶對優勢の様を今少し詳細に Maki-Faucett 表により眺めて見よう。今度は indispensable words を二群に分ち、essential words 三群に分ち名詞動詞形容詞の三者を特に明示し後の品詞は一まとめに現した。



1. 最も重要な 1—4 群の約 150 語中には殆ど F—L 系語の侵入を許さない。殊に代名詞助動詞前置詞の如き form-words に於ては全く縮出して居る。そして之等の語は殆ど最初の 150 語中に出切つてしまつて居る。後段になつてから現れるのは代名詞では self pronoun とか、助動詞では won't, didn't 等を一語に數えた爲である。前置詞では at, for, in, of, on, to, with (以上一群) about, by, from (以上二群) の 10 が入つて居り之は Kennedy^(註7) の研究では最初の 100 語中に by の代りに over が入つて居るだけで他は全く同じで勿論總て純 AS 語である。前置詞に F-L 要素が入るのは遙かに後段になつて動詞から轉じた except, during 等, hybrid の around, 複合的な on account of, in addition to 等 (之は單語としては名詞に編入してある) が現れてからである。代名詞では they, their, them のみが之も Germanic 系ではあるが Scand 系で後は純英語、助動詞は全部國産である。

2. 名詞は indispensable words 内に於てのみ數的に動詞の下位にあるが漸次増加して essential words 内では遂に 50% を越える。且その内での FL 系含有率も A 22%, B 42%, C 56%, D 56%, E 71% と正しく増加の傾向を見せる。

3. 動詞は indispensable words 中では名詞より優勢であるがそれを過ぎると漸減の兆を見せる。その FL 系含有率は A 4%, B 13%, C 45%, D 56%, E 67% と之も次第に増すが名詞に比べると常にその割合は下廻る。

4. 形容詞についても大體同様な傾向が見えるが名詞動詞形容詞の三者だけで後半では全品詞の九割から九割五分を占めてしまつて居るのは注目すべき事實である。

M-F 表には品詞が明示してないので、その決定は Thorndike 辭書が重要な意義に先行位置を與えて居るのを利用した。従つて love は名詞に入れてある類である。同一品詞でも同音異義語は Skeat の先行語に分類した。故に bank⁽¹⁾, a mound of earth (Scand), bank⁽²⁾, for money (F-Teut) は前者に入れる。兩系統間の hybrid, たとえば because (E. and F-L) の如きは兩者に 0.5 を加點して計算した。猶語源決定は總て Skeat による。

國語で語別の頻度研究は見當らぬが三戸雄一氏の品詞別分類に依れば次の如くである。^(註3)助詞36%, 助動詞9%, 動詞18%, 名詞22%, 副詞5%, 形容詞3%, その他7%, この内助詞, 助動詞は絶対に漢語の介入を許さぬ世界で國語の最も國語的な部面である。職能に於てはやや異なるがその點英語の前置詞助動詞と比較し得る。代名詞にはもし僕, 君, 彼女(之は奇妙な和漢混交の所謂湯桶讀みの語)等を代名詞と判するなら英語と異り外來要素を許して居る事となるが之等はまだ名詞的感覚が残つて居り(僕=Your humble servant, 君=my lord, 彼女=that woman)代名詞に入れぬ説の方が有力である。此等形式要素(國文法で言う辭)に對し意義要素(詞)中には漢語を多く攝取して居るがその中動詞形容詞について一言する。

漢語が動詞になるのは漢語の語幹に國語の活用語尾を付けて、1. 變化する型のサ變, 2. 變ずる型のザ變, 3. 變じる型のザ行上一段, 4. 化す型のサ行四段活用等色々の型があるが大體に於てサ變系統で、ごく稀に牛耳る、料る、等のその系統以外の語があるに過ぎぬ、變化するは變化をすると言ひ替えられる様に語幹の漢語は名詞的概念の下に捕えて居る。故に現代英語に顯著な傾向である名詞に基本的な動詞を付けて動詞代用にする表現、變化する make a change, 害する do harm, 御覽す give audience, 一服する have a smoke, 注意する take care 等と一脉相通する物を持つて居る。かかる傾向を一層人爲的に擴大した物が Basic English, 又は土井光知氏の基礎日本語等の根本原理である。サ變動詞は漢語に限つたわけではないが事實現代の法律論文新聞の文章を見ると動詞の六七割は漢語のサ變動詞である。Basic English が FL系の綜合動詞を英語から排除し、替えるに少數の所謂 operative と名詞の分析的動詞を以てする事に英語の簡略化の一大眼目を置いた事と對象して興味が深い。然し Basic English が全體的に果してFL要素を排除出來たかと言へば下表の物語る通りである。

作用詞その他	100語中	3語	3%
一般物(名詞)	400語中	233語	58%
繪に描き得る名詞	200語中	72語	36%

性質の名(形容詞) 150 語中 - 58語 38%

計 850 語中 365語 46%

即ち動詞を極度に制限した結果その部面ではFL系の物は皆無に近く消失した (operative 100語中の三語は very, quite, please の三語) 然しその他にあつては可成高率で總數 850 語と言へば MF 表では value 20 あたり迄で839語であるが、それ迄の含有率は 32%, B. E. 全體の 46% に比れば反つて低い。事實 B. E. の名詞中には apparatus, reaction, expansion 等 MF 表で value 120 に當る語も入つて居る、120 と言う評價は Thorndike, Horn の兩表共に最初の 5000 語中にも入らなかつた indispensable words, essential words, useful words と分けられた更に下の narrow range words 中の special words に屬する事を意味する。この事は現在在る物を數えてなつた研究と、在るべき物を指示した理論との間隔から生じた物である。猶 BE で名詞を一般物と繪に描き得る名詞と分けた場合 FL 系の率が前者で58%, 後者で36%とかなりの差を見せて居るが之は FL 系借用語には抽象概念が多いと言う一般臆説を裏書きする物である。先に第二期の Latin 借用語には具體名詞の壓倒的であつた事を説明したがその後の文藝復興期から近代へかけて如何なる智識を英語が Latin の古典やフランス文化から学んだかを語つて居る。

形容詞の漢語借用は美々しい, 悪々しい, 等の重複型の形容詞に若干見えるがこの造語法も老衰し, 現在名詞の修飾にはそれに代り形容動詞正直な, 勤勉な, 型に漢語の應用が見られる。然し此は正直という名詞になと言う助詞が付いた感じが強く時枝政記氏等もその解釋で形容動詞なる分類を認めない。^(註9)英語の a man of honesty の如く前置詞+抽象名詞の構文, 或は FL 系の名詞に AS 系の接尾語の付いた beauti-ful 等と比較し得る物と思う。動詞の場合も同様であつたが語幹の漢語は名詞的概念の下に捕えて此に國語の補飾を付ける式である。英語の如く動詞形容詞をその儘に, 例へば *sēparāre* の p. p. *sāparātus* から inflection の一部まで移して separate を得るとか, national, fashionable の如く外國語の suffix まで含めて攝取する事は出来ない。又英語では beauti-ful の例とは逆に語幹が AS で suffix が FL 系の

hybrid たとえば goddess, endearment, hindrance, murderous, eatable 等の如き例も尠くないが國語では常に漢語の語幹に國語の辭が續く。孤立語で何等の活用語尾を持たない漢語であるから當然であるが詞の先行、辭の後續のパターンが極めて規則的である。たとえば

清晨入古寺 初日照高林

之は常建の詩の一節であるが國語では之と同じ表現をするのに次の様に言うであらう。

爽快な 朝だ。私は 古寺まで 散歩すると、微かな 日光が 高い 樹木を 照らしていた。

この様に詞は必ず漢語或は多く漢字で記された和語で、此に仮名の和語である辭が續く。我々は既にこの様な和漢混交の記述に馴れてしまつて奇異にも感じないがこの漢詩の英譯を次の如く仮に記述して見よう。

in the CLEAR DAWN I STROLLED into the ANCIENT CONVENT
the FRESH RAYS ILLUMINED the LOFTY FOREST.

grammatical elements を小文字で、semantic elements を大文字で記した物で甚だ奇異な感がするが初めての和漢混淆文に接した日本人も此と同じ感を抱いたのであらう。この大文字の部分だけを羅列したのが即ち漢文の表現である。英語には漢文と異り多くの形式語が用いられて居る點國語に似て居るが、見る如くそれ等は關係語の前又は後に現れ、國語の詞辭、詞辭の規則正しい統一がない。この點國語は山田孝雄氏の言う如く極めて論理的な一面がある。漢字の文字の下側に送り仮名を振る漢文訓讀の便法もかかる規則正しさを前提として始めて可能であつた。英譯は態と詞に當る部分には借用語を選んだ。(dawn と lofty とは Scand. 後の語は F-L 系である)この様に詞を 100パーセント外來語にする事も、しようと思えば出来る。然しその反對に辭、即ち小文字の部分を外來要素に變えようと試てもそれは不可能である。この點は全く國語と軌を一にしている。又漢字を輸入した折にたまたま漢字は表意文字であつた爲に意義を持つ詞はそれに相當する國語と關聯づける事が出来、此所に漢字を訓讀する術を考出した。然し辭に至つては漢語にそれ類似の物がな

く發音文字たる仮名の出現は當然豫期されたのである。漢字訓讀の風も我々には現在何事でもないがその始めは一大冒險であつたらう。今日雲雀と書いて「ひばり」と讀む日本語を評して cloud sparrow と書いて lark と讀ませる様な物だと難じた外國人が居る。勿論この攻撃は一面正しいが更に一步進んで雲を「くも」雀を「すすめ」と讀む事すら nuage を cloud, moineau を sparrow と發音する様な勇敢な試であつた事を知らねばならない。nuage を cloud と發音すると言うのは勿論假説であり不完全ながらも音聲文字である Italic, Germanic 兩語間には絶對實現不可能な事である。

第五章 構造論から

Semantics で言語が synthetic 又は analytic であると言う。單語について synthetic (綜合的) であると言う時はその語が一語にして多様の複雑な意義を内在して居ると言う意味で同じ内容を analytic (分析的) な言語ならば素因數の如き單純な語を數個組合せる事に依り表現するであろう。此所では英語にせよ日本語にせよその外來要素は自國語に對して綜合的である事を述べたいのであるがその前にこの綜合的と言う言葉を吟味する必要がある。それは内容の少し異つて居る二種の語に對し無差別にこの語を使つて居る嫌があるからである。二種の語とは一方はたとえば heifer の如き語、他方は disembark の如き語である。前者はその語の中に若い一雌の一牛、の三種の意義を含んで居る。(雌の牛は英語では cow と一語で表すけれど) 次に disembark も辭書に go down from the ship と説明してある。矢張り少くとも三個の複雑な

○英語で外國語の綴りをその儘に英語風に發音した稀な例に音樂用語の bass を [beis] (低音) と發音するのは basse (F) 又は basso (It) の綴りを bas (ME) > base (卑しいと同義) とイギリス風に讀んだ物である。

○雲雀式の讀方の多くは漢語である、海參, なまこ [hai³ shen¹] 海豚, いるか, [hai³ t'un²] 海象, せいうち [hai³ hsiang⁴] 海狗, おつとせい [hai² kou³] の如し。

○譯詩で in, into, 等の前置詞を form word に入れたが英語の前置詞は國語の助詞と比べると意義要素を多分に含んで居る into 中へ, after 後に, on 上に等, この點國語の助詞は完全に form word である。

意義を含んで居る點 heifer と同じく synthetic な語であると一般に言うのは理解される。然し兩者の差は前者が意義的には多種の内容を綜合して居ても形態的には完全に渾然たる一語で分解する事は出来ないのに反し、後者は明瞭に dis—em—bark の三に分解出来る。即ち away—get—ship とする分析が形の上からも行われて居る。唯 go down from the ship との差は分析が一語の中で行われて居るか、連語を爲して居るか丈の事である。此所で外來要素は自國語に比し綜合的であると言うのは主として漢語は heifer 型の意味で、FL は disembark 型の意味で綜合的であると言うのである。

元來古代日本語は非常に少數の語彙を連想により意義を擴大して行く、例えば上から神へ、^{かみ}端から^{はな}鼻への如くするか、又はその少數の語意を組合せて造語する。(こがね、くろがね、しろがね、あかがね等の如く)方法が極めて自由であつた。だから一方には語は漠然と廣義にわたり微妙な辨別を爲し切れない傾向もある。平安朝女流文学に親んだ人は如何に「ゆかし」「おかし」等で大概の感激が片付けられて居るかを知つて居るであろう。然し人智は進み感情が益々微妙複雑になつて來た時にはもつと一語ピッタリ正しい言葉 (le mot juste) が要求されるのは當然で、日本語はその要求を漢字漢語を消化する事により主として満たして來たと言ひ得よう。漢字漢語は和語に比し著しく綜合的である。たとえば馬扇の項を辭書に求めると活字が小印刷所には無いかも知れぬので意義だけ擧げるが「馬怒る貌」「馬肥えて盛なる貌」「馬銜を脱する貌」とか又毛並毛色の異つた馬を表す幾多の語があり、中には「脚毛白く他は黒き馬」とか「赤馬で黒いたてがみの馬」「逆毛の馬」終には「腹に病あり凹みたる馬」まで現れて來る。英語にも馬を表す多くの語があり horse, mare, stallion, colt, foal, filly 等吾々を悩ますが漢字は到底比べ物にならない程複雑である。尤も之は家畜が如何に深く生活に入り込んで居るかの生活様式の差とも見られるが、動詞形容詞等でも國語が分析的なるに比し漢語は著しく綜合的である、たとえば、見る動作を示すのに數十箇の語がある。眺(なが—める)、鑑(かんが—みる)省(かえり—みる)覲(ま—みゆ)視(み—つめる)相(あい—みる)覽(み—まもる)の如く國語ではそれ等を「みる」

を含む複合語で言い表す事が多い。^(註10) その中には「なが一める」の様に現代では一語の如く感ぜられる所謂 *disguised compound* も少くない。漢字はそれに反し先に述べた分解不可能型の綜合的語を選ぶ。然し此所に注意すべきは漢字の文字構成の考方の中に多分に分析的な考慮が爲されて居る事である。先の馬に關する語は全部馬扁であり、後の例には殆ど目又は見を中に持つて居る。中でも覽と言う字は監と見の合成、所謂會意文字で「み一まもる」意味である。漢字の八割を占めるといふ形聲文字の扁は主として意義の範疇を暗示し、旁は發音を指す、^(註11) (旁も意義を示すといふ説もある) 同、桐、銅、洞の如きである。

英語全體的に見てこの第一の意味に於ても國語より綜合的であると言える。そしてその綜合的な意味は自國系と外來系の語が共存兩立した時に一方が意味の *specialization* を起して得た例も少くない。良く引かれる例であるが F の *beef, pork, mutton* 等が單に原意の牛豚羊からその肉を意味する様になつた等は好例である。然しこれ等の論は又別の機会に譲り此所では FL 系語の第二の意味に於て綜合的な事、即ち *prefix, suffix* の自由な使用により語を無限に増加して行く力を述べたいと思う。勿論 OE にも *affix* 的造語法は發達して居たが FL 系の進出により OE の *prefix derivative* は多く廢語となつた。Lounsbury によれば OE で *flowan (to flow)* の語幹に *prefix* を付けた語は十語あつたが現在では *overflow* が残つて居るのみ、又 *sittan (to sit)* の派生語十三語は全部忘れられた。*again, against* を意味する *prefix, with* の派生語は二十語あつたが現在では *withdraw, withstand, withhold* しか残つていないといふ。廢語となつた OE と(1)、その仮定の現在の形と(2)、又如何にそれ等が全然同じ意味の FL 系の派生語複合語(3)により置換されたかを示せば

1	2	3
<i>wi ð -clepin</i>	<i>withcall</i>	<i>recall</i>
<i>wi ð -cwe ð en</i>	<i>withsay</i>	<i>contradict</i>
<i>with-settin</i>	<i>withset</i>	<i>resist</i>

wid-büggen	withbuy	redeem
with-stewen	withstop	countercheck

以上の内 countercheck は accent が第一シラブルにある位で獨立的勢力が強く純然たる派生語ではなく複合語に入れる。

suffix は prefix に比し比較的良く OE の姿を留めて居るのは prefix は主として意義に關聯し、suffix は品詞に關聯する一種の form-word であり當然後者に自國語の抵抗の強い事は先に品詞別の項にも述べた事であるが、然しこの領域にも FL 系の suffix, —age, —al, —tion, —ment, —ty, —able, —ative 等の進出は目覺ましい。此所で日本語に漢語の接頭語接尾語が入つて居るか否かを考えるに時枝誠記氏は一年間、能率化、世界觀、東海道線の最後の語の如きを接尾語中に入れて居られるが(註13)（尤も英語と比較して國語の接尾語は機能上單語内部の要素と考えるより一語として取扱う方が便利な事を指摘されて居る）國語内では漢字は一字で音讀される事は稀で、殆ど熟語の一要素として存在する（この點又後に述べる）現状であつて見れば、氏の様に考えると總ての漢字が接辭になつてしまうと思う。この點英語内における FL 系の affix との差があり、矢張り一語として認むべきであろう。それはともあれ英語は FL 系派生語により非常に語彙を増した。たとえば Latin : cedere (come, yield) を語幹として接頭語を付けて abscess, accede, access, antecede, accede, concede, decease, exceed, incessant, intercede, precede, proceed, recede, retrocession, secede, succeed 等の多くの語が出来、更にその各々に接尾語がついてたとえば succeed の名詞 success より successful, —fully, —ion, —ional, —ionally, ionalist. —ive, —ively, —less, —lessly, —or, —ory の如く無限に繁殖する。pro-を以て始る語は普通の辭書にも 500 程載つて居る。かように英語は廣範な綜合的造語法を取入れたが、FL の case, tense, person, voice までも屈折語尾で表す眞の綜合的語法までにはついに及ばなかつた。(註14)此等は分析的に代名詞助動詞前置詞を用い表現する近代英語の一般傾向に敵し得なかつた。そして現代の英語に残る僅かばかりの屈折語尾、動詞過去の —ed, 三人稱現在單數の s, 所有格の 's, 名詞複數

の s 等は FL 系語にも無差別に適合されるのである。

affix による派生語と, compound(複合語)との差は組成單位の獨立性の程度如何に過ぎない。(e. g. nobility—派生語, nobleman—複合語.) 故に次に目を複合語形成力に轉ずると漢語も FL もその力が強い。殊に漢字は國語中にあつて一字單獨である時は多く訓讀され, 音讀されされる場合は(つまり漢語の時)殆ど二語の合成である。實例により此點を説明すると憲法前文中の漢字使用は 600 字その内分は

漢字一字	19例	音讀 6, 訓讀13
漢字二字	110例	音讀のみ訓讀なし
漢字三字	6例	音讀のみ訓讀なし

即ち音讀されるのは一字では存する, 信する, 愛する, 反する, 有する, 通じの6例で, 後は殆ど全部二字よりなる複合語である。逆に訓讀される物は(即ち國語に漢字を振つた物)は唯一字の例にのみ現れる。此所では勿論日本製の漢語も廣く漢語と解釋する。前に disembark の例が出たが國語では船の事を單獨で「せん」とは言わず, 下りる事を「^ひ下する」とも言わぬ。然るに之が二語組合さると下船と言え, 下も船も下車, 下馬, 船長, 船首等自由な一種の living affix となる。漢語の複合力は次の様に考えてもわかる。良く alphabet は26字に過ぎないのに漢字は何万字あるからと簡単に難易を言う者があるが, 此説には若干の警戒が必要である。それは漢字は字であると同時に語でもあるので英語の語數と比較する事も必要である。すると康熙字典所載總字數 46216 語も新版 Webster の 55 万語には遙かに及ばぬ。殊に當用漢字は僅々千數百字でこの範圍内で万般の表現が一通り出來ると言うのは(勿論和語がその他にあるが)一方では漢字の複合語製造力の強い事を物語つて居る。一字の漢字の中にも既に高度の分析複合の力が働いて居る。^(註15)たとえば青は純粹を意味する。色にして純なるは青, 水の純なる物は清, 米の純なる物は精, 日の純なる物は晴の如く可成複雑な分析がその底にある。この様な考方は一つの新しいアイデアを二個の要素の和により表現する複合語と同じ物である。漢語の複合力をそれに對應する意味の英語と比較して見る。

科学 science, 化学 chemistry, 文学 literature, 工学 engineering, 倫理学 ethics, 経済学 economics

汽車 train, 自動車 automobile, 乗合自動車 bus, 貨物自動車 truck, 客車 carriage, 馬車 coach, 機關車 locomotive,

庭球 tennis, 卓球 pingpong, 撞球 billiard, 水球 water polo, 氷球 ice-hockey

勿論一方には英語にも複合的に philology, street-car, bicycle, base-ball の如き言方もあるが漢語はそれ等の範囲より更に廣く擴大して行く。(氷球などは実際には使用されるのは球形ではない平な puck である。文学も学問と名乗る程もない大衆文学にも使う。)實にこの複合語を作る容易さは吾々が今日漢語を好んで使用する重大な原因である

然し又一方には漢語の熟語は何等の意義を加える物でなく唯形式的に二語を揃える習慣から來て居る物が多い。即ち 1. 助辭を含む。突如, 肅然。2. 重複的な物, 河川, 思想, 兒童, 跳躍。3. 重語的な物, 悠々, 關々。等誠に例が多い。これ等のいずれにも入らぬが國語と比較して見るとその一字は無用の追加である物も少くない。國家—くに, 家庭—いえ, 神社—やしろ, 寺院—てら, 等で家, 庭, 神, 院等は國語では不必要な分子である。尤も之は同音異義語の驚く程多い漢字(たとえば「字原」で見るとコウと發音する字 596, ショウと發音する字 370 を數える)が意義の混亂を防ぐための苦肉の策であると言えよう。(それでもコウショウと發音する熟語は二十近くある。英語の homonym がせいぜい三四語であるのと比べたら雲泥の差である)この特徴を明かにする爲に憲法とその英譯との語を比較して見よう。

われらは、全世界の國民が、ひとしく恐怖と缺乏から免かれ、平和のうちに生存する權利を有する事を確認する。

We recognize that all peoples of the world have right to live in peace, free from fear and want.

日本國民は——國權の發動たる戰爭と、武力による威嚇又は武力の行使は、國際紛争を解決する手段としては永久にこれを放棄する。

—the Japanese people forever renounce war as a sovereign right of the nation and the threat or use of force as means of settling international disputes.

英語が殆ど一シラブルの容易な語を用いて居るのに漢語は言合せた様に二字の複合語を使つて居る對照は余りに明かである。

國民	people,	世界	world,	權利	right,
生存	live,	平和	peace,	恐怖	fear,
缺乏	want,	戰爭	war,	威嚇	threat,
武力	force,	行使	use,	手段	means,
解決	settle				

戰爭, 平和, 國民の様な現代では常住坐臥に用いる語までが複合的に現されねばならぬとは, 英語に比べて不思議な感がある。(尤も英語の world だけは元來は O.E. weoruld: wer=a man, eld=an age で複合語である)

OE の複合語がそれと全然同一の L 系の語により置換えられた例も少くない。

O. E	字 義	Mn. E
efnniht	even-night	equinox
sunnan-stede	sun's stay	solstice
sunfolgend	sun follower	heliotrope
well-willende	well-wishing	benevolent

何故此等外來複合語が自國語より好まれたか, その底に横たわる心理は現代の新語でも例えば far-sight と言わず television が, light-picture と言わず photograph が選ばれる心理と共通な物であろう。そしてそれは國語でも, さわやまがたくさん澤山に, しゅつちようではるが出張に, ふとねが大根にとあて字が母屋を奪つた例等と共通な心理が働いている。勿論一つにはむずかしい物を高尚とする傾向がある。ラテンや漢字の方が世界性を持つているからと言う解釋もあるが特殊の學術語を除いてはそれは大きな理由ではなさそうである。私は寧ろ複合語が新しい單位として一事物一概念を指す爲にはその合成意義が余りにも露出して居

ないで付かず離れずの方が望ましいと言う事に大きな原因があると思う。その點一字として存在し難い漢語，ラテン（英語内では equi=equal, nox=night は容易に想像し得て然かも單獨に存在しない）は非常に目的に叶つてい
ると言うべきである。英語に比しドイツ語は隨意に複合語を作る。英語は寧ろ
その様な場合外來語（複合語であると單一語であると問わず）に頼る傾向があ
る。次にその様な例でドイツ語の複合語が國語と奇妙に同一の組成よりなつて
居る例をあげる。

ドイツ語	漢語	英語
Sonnenschirm	日傘	parasol (F-Port-L)
Regenschirm	雨傘	umbrella (It-L)
Landkarte	地圖	map (F-L)
Bleistift	鉛筆	pencil (F-L)
Krankenhaus	病院	hospital (F-L)
Spielzeug	玩具	toy (D)
Schallplatte	音盤	record (F-L)
Streichholz	つけ木	match (F-L-GK)
Halbinsel	半島	peninsula (L)
Abendessen	夜食	supper (F)

又現代英語に多い派生語複合語を國語に譯す場合語順の關係から漢語に譯す方
が便利で盛に行われる。rearmament 再武裝, pseudo-classicism 擬古典主義,
super-dreadnaught 超弩級, non-fiction 非小説, anti-American 反米。

第六章 音 聲 的 に

漢語も FL 系語もそれ獨特の音調を持つている。漢語は國語に入つても遂に
開音節である國語の特性を揺がす事は出來ず，葉 [yep]は[yo:]，鐵 [tets]は
[tetsu] の如く開音二音節に讀まれる様になつたが，語頭の濁音，語中の撥音
促音拗音等を發達させ，その影響で國語中にも撥音便促音便ウ音便イ音便等を
發生させた事は音韻上大きなプラスである。國語中の漢語は和語の柔和なるに

比べ力強い堂々たる響きの故に愛好される。英語内のL系語も多くは長大で所謂 Sesquipedalian (words a foot and a half long) は大概かかる語である。The multitudinous seas incarnadine (*Macbeth*) とか adamantine rock, impenetrable (*Paradise Lost*) 等の詩句の持つ莊重なリズムは此所から生れる。だから巧な翻譯者はそのリズムを漢語を多く使つた日本語に移して表現する。もつともFL系の語は長いと言う一般論は若干の修正が要る。Maki-Faucett 表によりしらべた單語のシラブルの長さは次の如くである。A は indispensable words, Bは essential words である。

	一 シラブル語				二 シラブル語				三 シラブル以上			
	E		F-L		E		F-L		E		F-L	
A	244	72%	21	6%	48	14%	17	5%	3	1%	5	1.5%
B	349	30%	207	18%	146	12%	345	29%	22	2%	118	10%
計	593		228		194		362		25		123	

此で見ると頻度数の高い語はE系も FL系も單シラブルの語が多く後者で一シラブルの語が228語、二シラブルの語が362語もあるのは意外である。然し平均して矢張りFLはEより長い(平均Eは1.288シラブル、FLは2.496シラブルである)四五シラブルの語はEには唯一つしかない。この表中にはいずれにせよ長大な語は余り現れないのは當然である。常に口にする代名詞助動詞前置詞等がごく短い事は必然で、國語のわれわれの如き代名詞が頻發しては到底煩雜にたえぬ。

然し結局の所此等の語は音聲的には得る所より失う所の方が多いと言わねばならない。Jespersen は diatribist とか phonotypy とかの種類の語が學者辭書の差で色々に發音されて居る事實を挙げ、此等は寧ろ發音して理解されるよりも文字を通し目に訴える eye-word として價值がある事を言つて居る。^(註16)この批評は漢語にあつては一層適切に當はまる。漢字の發音は元來の平上去三聲を讀みわけず、開合の別もせず (e.g. 看 [k'an]⁴, 觀 [kuan]¹ 共に現在では [kan]), 舌内 [n], 唇内 [m] の尾韻を共にンと發音する等々國語獨特の讀

方により現在では單獨に發音するか、長音にするか、拗音にするか、後にイ、ンを付けるか（若干はク、ツ、キを付ける）それ等の中若干の讀方があるだけである。カ音を例にとればカ、カイ、カク、カツ、カンの五つの發音しかない。その爲に前にも述べた様に homonymが濫出する。それ等は文字を見なければわからない。新聞等を見てもスペースの問題もあり見るだけで發音の出来ない文句に時折出会う。「今冬の石炭は」とか「何某渡布」とか「日埃間の(日本エジプト間)」等の語は少くとも發音されただけではわからない完全な eye-words である。この漢字の視覚面をねらつて効果を擧げる極端な例は日夏耿之助の詩、たとえば彼の「咒文乃周圍」には「おきな」の一語に次の様な種々の字を當てている。黄老、老漢、詩翁、道老、佚老、頽人、神人、羸老、幽人、杖者、皓髮。矢野峰人氏は彼の詩を批評して「一彼は漢字特有の字面の與ふる繪畫的效果を十二分に活用する事により視聽二覺の交錯によるイメージの創造をねらつて居る」と言うのは適評である。^(註17)

然し遠方に思想を伝える術としては文字によるより外なかつた昔と異り、電話、ラジオ、トーキー、蓄音機、録音機、擴聲器等々耳に訴える方法が驚くべき進歩を遂げた現代ではこの角度から言語の適否は主として論ぜられねばならない。こう考えて來ると英語日本語の外來要素にも大きな變化が來る事が豫想され、現にその徴候は見え始めて居る。

以上で大體の論を終るが、當然論すべくして論じなかつたのは自國語と借用語の語感の差、使われる層の問題等である。此は論中引用した諸著その他に既に詳細に述べられて居る事であり、それに自分として新しく加える何物もない爲である。又終始、語の問題に限り syntax にまで論が及ばなかつた。この點は更に研究を續けたいと思う。

参 考 書 目

註1. 菊澤季生「國語と國民性」修文館 昭和十五年。

註2. O. F. Emerson: *The History of The English Language*. (Macmillan, 1922. pp 125—132).

註3. 波多野完治「現代文章心理學」

註4. I. Maki and L. Faucett: *A Study of English Word-Values Statistically Determined From The Latest Extensive Word-Counts* (Shinozaki Shorin 1952).

註5. O. F. Emerson : *ibid* p147.

註6. 菊澤季生 同書。

岡井慎吾「漢語と國語」(明治書院, 國語科學講座)等による。

註7. A. G. Kennedy : *Current English*. (pp 426—)

註8. 三戸雄 - 「日英兩語比較の實際」(「語學教育」第222號所載)

註9. 時枝誠記「日本文法國語篇」(岩波全書 pp 128—)

註10. 山田孝雄「日本文法論」p 170以下參照。

註11. 倉石武四郎「漢字の運命」岩波新書。

註12. T. J. Lounsbury : *General History of The English Language* (日本版 pp 84—)

註13. 時枝政記, 前書, p 149.

註14. E. Sapir : *Language* p 208.

註15. 倉石武四郎, 前書, p 18.

註16. Jespersen : *Growth and Structure of the English Language* p 132.

註17. 矢野峰人「日本現代詩大系, 五卷」解説。